

安喜さんの作品を見る幸せは、どこからくるのでしょうか。この問いに答えてみたいと思います[注]。以前、絵の幸せについて考えたことがあります [1]。そこで得たひとつのこたえは、絵が生き続けることの大切さでした。生命と同じく、コントロールできない外部との関わりのなかで、常に壊れ続けそして修復され続けていることが絵の幸せなのだ、と。

ですから、生命のように「明滅」するもの [2.3]、「築かれては崩壊」し「揺れ、移ろう」もの [2.1] に関わる安喜作品がわたしの心を打ったのは、ごく自然なことなのかもしれません。

それだけではなく、安喜作品に見られるそうした揺動が、コントロールできない他なるものとの関わりから生まれていることも、わたしをとらえました。

たとえば、「消失し〈変容した〉」街シリーズの作品は、訪れた街の地面（＝そこに流れた長大な時間とそこに生きた無数の人々の記憶の痕跡）を写し取ったフロタージュから生まれています [2.1]。また、あえて近代以前の東洋絵画の手法「描き残し」を甦らせたり（「松林図」） [2.2]、源氏物語絵巻や洛中洛外図のような日本の伝統的絵画スタイルを取り入れて時空間を多元化したり [2.3]、卵テンペラや胡粉さらには現場で採取した砂などさまざまな素材を組み合わせてきたのも、他なるものの取り込みであると感じます。

そのようにして、「西洋と東洋、時間と空間、遠くと近く」 [2.1] といった「両極を往き来し」「入れ替えようとする」 [2.2] 安喜作品は、ラスコー洞窟のような「絵画の始源」 [2.3] にも、また「静謐さとざわめき」という視聴覚の交通から生まれた「玉響（たまゆら）なる荘厳」がもたらす「この世ならぬ世界」 [2.4] にも比肩すべきものとされてきました。またそれは、災害やウィルスなど、コントロールできないものとともに生きるほかないわたしたちの明日を考えるうえでも、きわめて示唆に富むものとなるでしょう [2]。

そうした読み取りができるのは、安喜作品が、類のない広がりと深さをもつもの、見るたびに新しい気づきをもたらす、名づけようのないものだからではないでしょうか。そこには、瞬きから地球の生成にいたるまで、さまざまな時間が積み重ねられています。そんな安喜作品を見ることのできる幸せを、たくさんの方に感じていただきたいと思います。

[注] ただしその際、作品をわたしの思考に閉じ込めることのないよう、以下の文献からわたし以外の著者のことばを引き、わたし自身の枠組みに重ねていくことにいたします。

文献

[1] 秋庭史典（2020）『絵の幸福—シタラトモアキ論』みすず書房

[2] 塩田京子 企画・編集（2021）『安喜万佐子 Chaos from Order, Order from Chaos』galerie 16

[2.1] 河村亮（2021）「シッポを追いかける—廣大無辺の風景へ」

[2.2] 木下長宏（2021）「明滅する畏怖—安喜万佐子の「松林図」をめぐる断章」

[2.3] 仲野泰生（2021）「安喜万佐子の絵画—一人で絵画の始源を問うこと」

[2.4] 篠原資明（2021）「玉響なる荘厳—ひとつの安喜万佐子論」

〔2.1〕〔2.2〕〔2.3〕〔2.4〕はすべて [2] に収録